

## 聖書ヘブライ語から見た英訳聖書の進行形

橋本 功

### 0. ヘブライ語能動分詞と英語の進行形

聖書ヘブライ語（ヘブライ語）は時制を表す動詞組織を持たず、相を表わす動詞組織を持つ言語である。この組織によって各動詞は語幹から完了形と未完了形を屈折派生させ、文法範疇としての完了相と未完了相を明示する。しかし、ヘブライ語の未完了相は未完了形だけによって明示的に表現されるのではなく、英語の現在分詞形に相当する能動分詞形によっても表現されている。ヘブライ語能動分詞形は単独で述部を構成することができ、「主語—能動分詞」の語順をとる。ヘブライ語は一般には連結動詞を用いないので、この構造は英語の進行形に対応する構造である。〔連結動詞を用いる構造については後に言及する。〕

表1は、*Genesis* XLI を資料として用い、未完了形と能動分詞形の出現率の比較を試みたものである。

表1

動詞の形態	使用数	GENESIS XLI
未完了形	12	31, 33, 33, 34, 35, 36, 38, 40, 44, 55, 55.
(NP+) 能動分詞形	18	1, 1, 2, 3, 5, 6, 10, 15, 17, 18, 19, 22, 23, 25, 27, 28, 32, 35.

この表から、ヘブライ語聖書では能動分詞形が未完了形に劣らず、頻繁に使用されているという一般的事実を推察することができよう。ヘブライ語学者達の指摘によれば、両者は共に“duration”を表すことができる。この点では、両者共に英語の進行形と類似の意味機能を担っていると言える。興味深いのは、“duration”の下位の意味機能に関しては、両者は互いに相補分布をなす傾向があるというヘブライ語学者達の指摘である。すなわち、未完了形は“progressive continuance” (Driver, 1892: 22 (§21)), “actions continued or repeated” (Kautzsch, 1980: 315), “succession of points” (Davidson, 1976: 130 (§97)) を主として表すのに対して、能動分詞は“mere continuance in the sense of duration without progress” (Driver, 1892: 28 (§21)), “line” (Davidson, *loc. cit.*) を主として表す。この違いを Kautzsch (1980: 315) は(1 a)-(2 a)の例を用いて説明している。

- (1) a. BH: and-river flowing out-of-Eden to-water [AM-] the-garden —  
 (能動分詞形)

Gen. II 10.

- b. NEB: There was a river flowing from Eden to water the garden —  
Gen. II 10.
- (2) a. BH: and-vapour went-up from-the-earth — Gen. II 6.  
(未完了形)
- b. NEB: A flood used to rise out of the earth — Gen. II 6.
- (3) a. BH: asked-him the-man to-say what-you-seek and-said [AM-] broth-  
(未完了形)  
ers-of-me I seeking — Gen. XXXVII 15~16.  
(能動分詞形)
- b. NEB: a man ... asked him what he was looking for. He replied,  
‘I am looking for my brothers..’ — Gen. XXXVII 16~17.

[ヘブライ語文は英語に逐語訳されている。以下、それをヘブライ語文 (BH) と呼ぶ。]

すなわち、(1a) の能動分詞は Eden からの川の流れることが絶えることのない流れ (“a continuous, uninterrupted stream”)であることを表すために用いられているのに対して、(2a) の未完了形は次から次へと新しい “vapour” が繰り返して立ち登る様を表すために用いられている。この Kautzsch の説明を補強する意味で (3 a) と (32 b) のヘブライ語文は興味深い例である。なぜならば、疑問文中の focus となる動詞が未完了形であるのに対して、その応答文の動詞が能動分詞形であるからである。これは、未完了形と能動分詞形が互いに異なる意味機能を分担しあっていることを示す好例である。コンテクスト上、間断なく行なわれている応答者の行為が能動分詞によって強意的に表現されているという解釈が自然である。このように形態及びその意味が互いに異なる 2 種類のヘブライ語表現が *The New English Bible* (3 b) と Purver 訳聖書 (32 a) の各英訳聖書では同一の表現形式すなわち進行形で訳されているという事実によって、ヘブライ語の相表現の発達を知るができる。

未完了形と能動分詞形との間には、それ程厳格ではないにしても、意味機能上このような相補分布の関係が存在しているので、能動分詞形が未完了形と同程度に頻繁に用いられるという現象が生じるのである。

能動分詞の持つ “duration” の意味をさらに強調しようとする場合には、英語の be 動詞に相当するヘブライ語の連結動詞を能動分詞の直前に付加する (Davidson: 136)。その例が (4 a), (5 a), (6 b) 等である。その結果現れるヘブライ語構造は、まさしく、英語の進行形と同じ統語構造である。

- (4) a. BH: he was feeding with-brothers-of-him flock — Gen. XXXVII 2.  
(能動分詞形)
- b. AV: Joseph ... was feeding the flocks with his brethren,
- (5) a. BH: and-was Samuel offering the-burntoffering — I Sam. VII 10.  
(能動分詞形)
- b. AV: And as Samuel was offering yf the burnt offering,

表 2 は *Genesis* (XIV~XXIV) におけるヘブライ語の「NP (+連結動詞)+能動分詞」が Tyndale 訳聖書 (1530) (TB), 欽定英訳聖書 (1611) (AV), Purver 訳聖書 (1764) (PB),

表 2

ヘブライ語の「NP(+連結動詞)+能動分詞」構造と英訳表現						
GENESIS XIV~XXIV						
BH の進行形	TB 訳	AV 訳	PB 訳	NEB 訳	BH の進行形が NEB で進行形または現在分詞形として保存されている場合	
XIV	12	S	S	S	P →	who <i>was living</i> in Sodom
XIV	13	S	S	S	P →	who at that time <i>was dwelling</i>
XV	2	S	S	S	S	
XV	14	S	S	S	S	
XVI	8	S	S	P	P →	I <i>am running away</i> from my mistress
XVI	13	S	S	S	P →	who <i>was speaking</i> to her
XVI	13	S	S	S	A	
XVII	9	S	S	S	S	
XVIII	1	S	S	P	P →	As Abraham <i>was sitting</i>
XVIII	2	S	S	P	A →	*he saw three men <i>standing</i>
XVIII	8	S	S	S	S	
XVIII	10	S	S	S	P →	Now Sarah <i>was listening</i>
XVIII	16	S	S	S	S	
XVIII	17	S	S	S	S	
XVIII	21	A	A	A	A	
XVIII	22	S	S	S	A →	Abraham <i>remained standing</i>
XIX	1	S	S	P	P →	Lot <i>was sitting</i> in the gateway
XIX	13	S	S	S	P →	because we <i>are going to destroy</i> it
XIX	14	A	S	P	A	
XIX	14	S	S	S	P →	the LORD <i>is going to destroy</i> the city
XX	3	S	A	A	S	
XXI	6	S	S	S	S	
XXI	22	S	S	S	S	
XXIII	10	S	S	P	P →	the Hittite <i>was sitting</i>
XXIV	3	S	S	S	S	
XXIV	13	S	S	S	S	
XXIV	13	S	S	S	P →	the women of the city <i>are coming out</i>
XXIV	21	S	A	A	P →	The man <i>was watching</i> quietly
XXIV	21	A	A	A	A	
XXIV	30	S	S	P	A →	*he... found him still <i>standing</i>
XXIV	37	S	S	S	S	
XXIV	43	S	S	S	S	
XXIV	43	S	S	S	S	
XXIV	45	S	S	S	A →	*I saw Rebecca <i>coming out</i>
XXIV	49	S	S	S	S	
XXIV	62	S	S	S	P →	Isaac... <i>was living</i> in the Negeb.
XXIV	63	P	P	P	A →	*he... saw camels <i>approaching</i>
XXIV	65	S	S	S	A →	Who is that man <i>walking</i> across the open towards us?
進行形 総数	38	1	1	8	13	*=ヘブライ語間投詞(一種の deictic expression) 'behold' に導かれた節が NEB でしばしば「SVOv-ing」構造で訳されている。

(N. B.: P=進行形; S=単純形; A=P, Sを除く表現.)

*The New English Bible* (1970) (NEB) の4種類の英訳聖書でどのような表現によって訳されているかを例示し、さらに、特に NEB 訳については、このヘブライ語構造の能動分詞が現在分詞として現れている例だけを示したものである。

この表によると、TB, AV, PB ではヘブライ語構造「NP+能動分詞」を英語の進行形に置き換えている例は極めて少ない。しかしながら、進行形の発達と共にこのヘブライ語構造が英語の進行形に置き換えられている例が増加していることが明らかになる。そして、表2に挙げられている NEB の進行形は、現代英語から見て、なんら違和感を与えない。また、*deixis* の機能をも同時に持つ間投詞 (= 'behold') に導かれたこのヘブライ語構造の能動分詞が、NEB では、知覚動詞構造 (*find/see*+NP+ *v.-(ing)*) の中で現在分詞となっているが、これは異なる観点からこのヘブライ語構造が現代英語の進行形と類似の意味を表していることを示すものである。

英語の進行形は17世紀になってようやく口語を中心に一般化され始めたばかり (Nickel, 1966: 392) であるが、意味及び統語構造が進行形と類似している迂言構造がすでに紀元前1200頃から紀元前200頃のヘブライ語に存在していたことになる。以下、このヘブライ語構造をヘブライ語進行形と呼ぶことにする。

本稿では、英訳聖書の進行形がヘブライ語、特に「ヘブライ語進行形」とどの様に関わっているかを考察することにする。従って、ここでは英訳聖書の進行形の詳細な意味分析は行わない。

## I. 初期近代英語訳聖書の進行形とヘブライ語

### I. i. Tyndale 訳聖書 (1530) の進行形

TB の *Genesis* と *Exodus* とを調査した結果、*Genesis* には8例 ((6a) - (13a)) の進行形が用いられていたが、*Exodus* には1例も進行形の例を見つけることができなかった。以下はそれらをヘブライ語構造と対照させながら示したものである。また、それらをまとめたものが表3である。

- (6) a. TB: I must *be wanderynge* and a vagabunde vpon the erth, — *Gen.* IV 14.  
 b. BH: and-*I-shall-be wandering* and-moving-to-and-fro on-the-earth
- (7) a. TB: And he *was buyldinge* a cyte — *Gen.* IV 17.  
 b. BH: and-*he-was building* city
- (8) a. TB: beholde *ȝ camels were cominge.* — *Gen.* XXIV 63.  
 b. BH: behold camels *coming*
- (9) a. TB: Beholde we *were makynge* sheues in the felde: — *Gen.* XXXVII 7.  
 b. BH: and-behold we *binding* sheaves in-midst-of the-field
- (10) a. TB: a companye ... *were goynge* doune in to Egipte. — *Gen.* XXXVII 25.  
 b. BH: caravan ... *going*

- (11) a. TB: as hir soule was a departinge, — Gen. XXXV 18.  
 b. BH: and-was in-departing soul-of-her  
 (前置詞+不定詞)
- (12) a. TB: And Isaac was a comige from the well — Gen. XXIV 62.  
 b. BH: and-Isaac came from Beer-lahai-roi  
 (完了形)  
 (Cf. NEB: Isaac meanwhile had moved on as far as Beer-lahai-roi)
- (13) a. TB: take hir ad be walkynge. —Gen. XII 19.  
 b. BH: take and-go  
 (命令形)  
 (Cf. AV: take her and goe thy way)

表 3

TYNDALE'S BIBLE	TB の進行形	ヘブライ語進行形に対応	類似構造に対応	Tyndale 独自の進行形使用	未完了形に対応
Genesis	8	5	1	2	[0]
Exodus	0	0	0	0	[0]

N. B.: 以下, 「...独自の進行形使用」とは対応する原典の表現がヘブライ語進行形やその類似表現ではないことを指す。[ ]=内数。

これらの資料から, TB の進行形使用総数 8 例のうち 5 例 (62.5%) の進行形はヘブライ語進行形の訳として現れていることが明らかになる。

また, これらの進行形のなかには興味深い翻訳現象とも言うべき例が見られる。それは (11a) の進行形に対応するヘブライ語表現である。このヘブライ語表現を英語の表現に置き換えると「be+in v-ing」となる。[ヘブライ語の不定詞は英語の動名詞に近い機能を持っている。] ヘブライ語のこの構造は英語の進行形の発達上重要な存在である「be+前置詞+v-ing」と類似の構造であることは言うまでもない。[このヘブライ語構造は, 時の副詞節あるいは付帯状況を表す節や句を作る時にしばしば用いられる。]「be+a v-ing」は, この構造の前置詞が弱音化した結果生まれた構造である。この構造は TB 翻訳当時使われていた (Visser, 1973: 1996 fn.) (12参照)。従って, (11a) は当時存在していた表現形式を利用して原典の構造 (11b) を保存しようとした訳であるとも言えよう。残り 2 例については, 構造上進行形と類似点が少ないヘブライ語表現が英語の進行形として訳されたものである。そのうちの 1 例 (13a) は, エリザベス朝英語では口語的な文体で使われ, “go (now)” と類似の意味を表した命令進行形 (Visser, 1973: 1959 §1836) である。この例から, 「鋤をとる少年」にも理解できるような聖書の英訳を試みた Tyndale の翻訳姿勢 (Nagashima, 1988: 57, q. v.) の一端を垣間見ることができる。原典に多くのヘブライ語進行形があり (表 6 参表), 且つ, Tyndale のこのような翻訳姿勢があったにも関わらず, TB に進行形使用が少ないという事実は, 当時, 進行形がまだ一般化されていなかったことを示すものであろう。

以上の Tyndale 訳 Genesis と Exodus における進行形の調査からは, Tyndale 訳における進行形の中には, 原典のヘブライ語進行形の影響がなく Tyndale 独自の判断で用いたと思われる例はあるが, 多くの進行形はヘブライ語の進行構造に影響されて現れてきたもの

であると言えよう。

### I. ii. AV (1611) の進行形

AV に関しては, *Genesis, Exodus, Job, Psalms* そして *Nehemiah* における進行形を調査した。その結果, これらの資料には次の21例 (14a-29a) の進行形が使用されていることが明らかになった。

- (14) a. AV: The oxen *were plowing*, and the asses *feeding* beside them, — *Gen.* I 14.  
 b. BH: The-oxen *were plowing* and-the-she-asses *feeding* at-hands-of-them
- (15) a. AV: and behold, the camels *were coming*. — *Gen.* XXIV 63.  
 b. BH: and-behold camels *coming*
- (16) a. AV: and behold, Isaac *was sporting* with Rebekah his wife. — *Gen.* XXVI 8.  
 b. BH: and-behold Isaac *fondling* Rebekah wife-of-him
- (17) a. AV: Ioseph ... *was feeding* the flocke with his brethren — *Gen.* XXXVII 2.  
 b. BH: (13a) *q. v.*
- (18) a. AV: and behold, hee *was wandering* in the field, — *Gen.* XXXVII 15.  
 b. BH: and-behold *wandering* in-the-field (主語は前節に明示)
- (19) a. AV: beholde, we *were binding* sheaues in the field; — *Gen.* XXXVII 7.  
 b. BH: (8b) *q. v.*
- (20) a. AV: when his sonnes and his daughters *were eating* and *drinking* wine — *Job* I 14 & 18 (類例).  
 b. BH: and-sons-of-him and-daughters-of-him *eating* and *drinking* wine
- (21) a. AV: While he *was yet speaking*, — *Job* I 16, 17 & 18.  
 b. BH: still this (=he) *speaking* — *Job* I 16, 17 & 18.
- (22) a. AV: Thy words haue vpholden him that *was falling*, — *Job* III 4.  
 b. BH: Stumbling uphold words-of-you  
 (=a stumbler)  
 (Cf. NEB: a word from uphold the stumblers)
- (23) a. AV: I *am doing* a great worke, — *Nehemiah* VI 3.  
 b. BH: work great I *doing*
- (24) a. AV: he seeth that his day *is coming*. — *Ps.* XXXVII 13.  
 b. BH: he-sees that-*coming* day-of-him
- (25) a. AV: And when the Sunne *was going* downe, — *Gen.* XV 12.  
 b. BH: and-*was* the-sun to-going-down  
 (不定詞)
- (26) a. AV: God ... shall raine it vpon him while he *is eating*. — *Job* XX 23.

- b. BH: God ... shall-rain on-him into-bowels-of-him
- (27) a. AV: MY heart is *inditing* a good matter: — Ps. XLV 1.
- b. BH: overflows heart-of-me matter good  
(完了形)
- (28) a. AV: while I was *musing* the fire burned: — Ps. XXXIX 3.
- b. BH: in-musing-of-me burned fire  
(不定詞)
- (29) a. AV: as her soul was *in departing*, — Gen. XXXV 18.
- b. BH: (10b) *q. v.*

表4は AV の進行形とそれらに対応するヘブライ語構造との関係を数字で示したものである。

表4

AUTHORIZED VERSION	AV の進行形	ヘブライ語進行形に対応	類似構造に対応	AV 独自の進行形使用	未完了形に対応
<i>Genesis</i>	6(+1)	6	(1)	0	[0]
<i>Exodus</i>	0	0	0	0	[0]
<i>Job</i>	11	9	0	2	[0]
<i>Psalms</i>	3	1	0	2	[0]
<i>Nehemiah</i>	1	1	0	0	[0]
TOTAL	21(+1)	17	(1)	4	[0]

(N. B.: (+1)=Be+in+v-ing)

これらの資料から次のことが明らかになる。すなわち、AV の進行形は、全体の77.2% (17/22) がヘブライ語進行形の訳として AV に現れたものである。それに対して、原典の表現の直接的な影響なしに現れたと思われる進行形は18.1% (4/22) を占めるにすぎない。

これら AV の進行形をその使用目的という点から考察するとどうであろうか。例文 (21a) は進行形で表現されている。しかし、*Genesis*, *Exodus*, *Job*, *Psalms* には類似構造 (“while + NP + 発話動詞”) から成る文が4例 (30a-d) あるが、いずれも動詞は単純形である。また、それらのうちの1例 (30a) に対応する原典の表現はヘブライ語進行形であるが、AV では進行形として訳されていない。

- (30) a. while hee yet spake (BH: *speaking*) with them, — Gen. XXIX 9.
- b. while he talked (BH: *in-talking*) with him. — Ex. XXXIV 29.
- c. while they continually say (BH: *in-saying*) vnto me, — Ps. XLII 3.
- d. while they say (BH: *in-saying*) dayly vnto me, — Ps. XLII 10.

[N. B.: (BH: v-ing=能動分詞形, in-v-ing=前置詞+不定詞形)]

さらに、(15a) と類似の構造 (“behold, NP+come”) から成る文が *Genesis* には9例

(31a-i) がある。[Introductory *there* 構文は含まれない。] そのうちの5例(31a-e)に対応する原典の表現は(15b)と同じヘブライ語進行形であるにもかかわらず、それらは進行形として訳されていない。一方、「be+前置詞句」からなる(29a)は(I.i. で言及した)ヘブライ語構造を複製したものである。

- (31) a. Beholde, seuen eares of corne came (BH: *coming*) vp — Gen. XLI 5.  
 b. behold, Rebekah came out (BH: *coming-out*), — Gen. XXIV 15.  
 c. behold, Rebekah came forth (BH: *coming-out*), — Gen. XXIV 45.  
 d. behold, Rachel his daughter commeth (BH: *coming*) with the sheepe.  
 — Gen. XXIX 6.  
 e. behold, Esau came (BH: *coming*), — Gen. XXXIII 1.  
 f. behold, the word of the LORD came (BH: verbless clause) vnto him,  
 — Gen. XV 4.  
 g. Behold, this dreamer commeth (BH: perfect). — Gen. XXXVII 19.  
 h. behold, his brother came out (BH: perfect): — Gen. XXXVIII 29.  
 i. Behold, thy sonne Ioseph commeth (BH: perfect) vnto thee: — Gen. XLVIII 2.

以上の事実からのみ判断するならば、AVのこれら21例の進行形のの一つ一つに対して一貫した使用理由や、単純形とは異なる意味機能を追求することは困難であるように思われる。むしろ、大胆ではあるが、次のような推論の妥当性が高いように思われる。すなわち、当時進行形は翻訳者達に馴染みがあったが、口語的性格が強い表現であった(Dennis, 1941: 859-863, Hashimoto, 1976: 35)。その進行形と類似の構造が原典に現れ、その上、それらが英語の進行形と類似の意味を表していたので、翻訳者達は原典の表現に牽引されて、「威厳」(Terasawa, 1985: 24)のある文体を目指した欽定英訳聖書(AV)にも、散発的にはあるが、進行形が出現することになったのではないだろうか。*Job* では進行形使用数11例のうち9例までが第1章の連続した節(13~18)に集中的に現れ、そして、それらが総てヘブライ語進行形の訳であることや、*Job* の他の箇所にも類似のヘブライ語進行形があっても、それらは進行形として訳されていないという事実もこの推論の妥当性を示すものであろう。

## II. Purver 訳聖書(1764)の進行形

「18世紀後半に入って進行形使用は一段と増加した」(Araki and Ukaji, (1984: 439))とされている。同じく18世紀後半に出たPBの*Genesis*には、表5に示されているように、46例の進行形が使用されている。これはAVの約8倍使用されていることになる。これら46例の進行形を原典のヘブライ語表現と比較・対照させてみた。その結果が表5にまとめられている。



表 5

PURVER'S BIBLE	PB の進行形	ヘブライ語進行形に対応	類似構造に対応	Purver 独自の進行形使用	未完了形に対応
<i>Genesis</i>	46	35 <sup>1</sup>	5 <sup>2</sup>	6 <sup>3</sup>	[4 <sup>4</sup> ]
35 <sup>1</sup> : XVI 8, XVIII 1, 2, XIX 1, 14, XXIII 10, XXIV 30, 63, 65, XXV 32, XXVI 8, XXVIII 12, 20, XXIX 2, 6, 9, 9, XXXI 12, XXXII 6, XXXIII 1, XXXVII 2, 6, 13, 15, 16, 25, 25, XXXV-III 13, XXXIX 22, XLI 1, 17, 29, 35, XLII 5, XLV 1. 5 <sup>2</sup> : 「(連結動詞+) 'in'+不定詞」: XXXV 9, 18; 「連結動詞+形容詞」: XXV 6, XLIII 27, 28. 6 <sup>3</sup> : XXXVII 19, XLVIII 2, [4 <sup>4</sup> :] XVI 8, XXXII 18, XXXVII 25, XXXIX 11.					

この表によれば、PBにおいても進行形総使用数の46例中35例、すなわち、約77%がヘブライ語進行形の訳として現れたものである。一方、原典のヘブライ語構造の影響を受けずに用いられたと思われる進行形は6例(約13%)にすぎない。

ただし、TBやAVとは異なり、PBにはヘブライ語の未完了形を進行形に訳している例が4例ある。それらは、(32a) - (34a)である。

- (32) a. PB: *whither art thou going?* ... *I am fleeing* from — *Gen. XVI 8 & XXXII 17 (18).*  
 b. BH: *and-where you-go* ... *I fleeing* — *Gen. XVI 8 & XXXII 17 (18).*  
 (未完了形) (能動分詞形)
- (33) a. PB: *And as they were sitting* to eat Victuals, — *Gen. XXXVII 25.*  
 b. BH: *and-they-sit-down* to-eat-bread  
 (未完了形)
- (34) a. PB: *About this Day as he was going* into the House to do his Business, — *Gen. XXXIX 11.*  
 b. BH: *in-the-day the-this he-went* into-the-house to-do work-of-him  
 (未完了形)

§0 で述べたように、ヘブライ語未完了形とヘブライ語進行形とは“duration”という基本的意味を持ち、下位の意味については相補分布をなす傾向がある。従って、未完了形の中にも、当然、英語の進行形を用いて訳出できる例はあると考えられる。それにもかかわらず、TBやAVでは未完了形を進行形に訳した例は見られなかった。しかし、数は極めて少ないがPBでは未完了形も進行形に訳されている例があるということは、PBの進行形は単にヘブライ語の進行構造にのみ影響されて現れたものではなく、意味上当時の英語の進行形と合致したヘブライ語表現がPBで進行形として表現されたことを示すものであろう。

### III. The New English Bible (1970) の進行形

表6はNEBの*Genesis*に現れている進行形とヘブライ語表現との関係を示している。NEBの進行形がTB, AV, PBの各英訳聖書の進行形と比べて大きく異なるのは、NEBではヘブライ語進行形以外のヘブライ語表現が進行形に訳されている割合が高く、全体の約37

% (30/81) を占めている点である。この現象は、意味を重視した翻訳に起因しているということとは言うまでもない。しかしながら、一方では、ヘブライ語未完了形を進行形に訳した例は少ないが、ヘブライ語進行形を進行形に訳した例は、NEB の進行形全体の58%(47/81) を占めているということもまた事実である。

表 6

NEB	NEB の進行形	ヘブライ語進 行形に対応	類似構造に 対 応	NEB 独自の 進行形使用	未完了形
GENESIS	81	47 <sup>1</sup>	4 <sup>2</sup>	30 <sup>3</sup>	[6 <sup>4</sup> ]
47 <sup>1</sup> : II 10*, IV 10,17, XIII 5,7, XIV 12,13, XVI 8,13, XVIII 1,10,22, XIX 1,12,14, XXIII 10, XXIV 13, 21, 62, XXVII 5,12, 42, 42, XXVIII 12, 13, 13, XXIX 6*, 8, XXXI 12, XXX 13, XXXV 1,7, XXXVI 24, XXXVII 7*, 9,13,16, 17, XXXIX 3, XLI 1,6,17,23,25,28,35, XLV 12. XLVIII 21, L 5,24. 4 <sup>2</sup> : 「前置詞+不定詞」=XV 12,XXXV 1,7,18,22, XXXVI 24, XLVIII 7. 27 <sup>3</sup> : II 2, III 10, XII 11, XV 2, XIX 29, XXVII 42, XXVIII 4, XXX 9, XXXVI 7, XXXI 1, 34, XXXII 4,18,26, XXXIII 14, XXXVII 23, XXXVIII 21, XL 18, XLII 16, XLVIII 2, L 11, [6 <sup>4</sup> :] XVI 8, XXXII 18, XXXV 3, XXXVII 15, XLII 36, XLVIII,17. * * * II 10*: There was a river flowing from Eden to water the garden, XXIX 6*: here is his daughter Rachel coming with the flock. XXXVII 7*: We were in the field binding sheaves (上例の中で BE と現在分詞との間に文の他の要素が挿入されているのはこれら3例のみ。)					

#### IV. ヘブライ語能動分詞の機能と英訳聖書の進行形

##### IV. i. ヘブライ語能動分詞の名詞的用法

すでに言及したように、ヘブライ語の能動分詞形は未完了形に比べて特に“duration without progress”を強調するという特性を持っている。一方、能動分詞には、ある性質や状態を持つ人間を表す名詞的用法がある。しかし、ヘブライ語は不定冠詞を持たないので、能動分詞が補語として用いられた場合、その能動分詞が名詞的用法であるのか、あるいは、進行構造のために用いられたものであるのかを見分けるのが困難な状況も生じる。(35a) - (37a) は一般に名詞的用法と解釈されている例である。

- (35) a. BH: I shall be in eyes of him mocking — Gen. XXVII 12.  
 b. AV: I shall seeme to him as a deceiuer,  
 c. NEB: I am tricking him
- (36) a. BH: for keeping she — Gen. XXIX 9.  
 b. PB: for she was feeding them.  
 c. NEB: for she was a shepherdess.

- (37) a. BH: I shall be wandering and moving to and fro — Gen. IV 14.  
 BH: wandering and moving to and fro you shall be — Gen. IV 12.
- b. VUL: ero uagus et profugus in terra — Gen. IV 14.  
 VUL: uagus et profugus eris super terram, — Gen. IV 12.
- c. OEH: ic beo woriende 7 flyma ofer eorþan: — MS. C, Gen. IV 14.  
 OEH: þu færst worigende 7 bist flyma geond — MS. B, Gen. IV 12.
- d. TB: I must be wanderynge and a vagabunde vpon the erth, — Gen. IV 14.
- e. AV: I shall be a fugitiue, and a vagabond in the earth. — Gen. IV 14.  
 [VUL=Vulgata; OEH=The Old English Version of the Heptateuch]

(35a) は AV では名詞として訳されているが、NEB ではその箇所は、進行構造の現在分詞として表現されている。(36a) は、NEB の訳によって示されているように、動詞によって表現されている行為を生業とする人間を表しているが、PB ではそれが進行形によって表現される。このように絶え間なく繰り返される行為を英語の進行形で表現した場合、その英語の進行形には感情的要素が加わると解釈されるのが一般的である。しかし、ヘブライ語能動分詞のこのような用法は名詞を作る（あるいは派生させる）ための言語手段であって、感情的要素を表現するための言語手段ではない。従って、translated version としての聖書の英語の進行形の解釈には慎重な態度をとらなくてはならない場合もある。

(37a) は同種のヘブライ語進行形が間接的にはあるが古期英語にまで統語的影響を及ぼしている例である。例文 (37a) にある 2 個のヘブライ語能動分詞は AV では名詞的用法として扱われている。一方、Vulgata (37b) ではこれらの能動分詞は、動詞の表す行為を “quality or tendency” として表す語尾 [- (ul)us] を動詞の語幹に付加した形容詞 (Greenough, et al., 1979: 152-153) によって訳されている。この形容詞は英語の現在分詞の形容詞的機能に極めて近いと言えよう。これらに対する古期英語訳聖書 (=OEH, 自由訳聖書) の表現を見ると、ラテン語の 2 個の形容詞のうち “uagus” だけが、MS. B と MS. C で現在分詞として訳されている。この現在分詞は MS. B では主格補語として用いられているが、MS. C では進行構造を形成していると解釈することができる。もしもこの解釈が正しければ、間接的にはあるが、この古期英語の進行形の存在にはヘブライ語能動分詞が関わっているとは言うまでもない。

#### IV. ii. 未来を表すヘブライ語能動分詞と英訳聖書の ‘be going to…’

英語の動詞 ‘go’ に対応するヘブライ語の動詞は ‘hālak’ である。この動詞は定形のままで、本来の移動の意味ではなく、継続相 “continuance” のみを表現するために用いることができる (Kautzsch, 1980: 344 (u))。この用法の ‘hālak’ が瞬時動詞と結合すると、近接未来を表わすようになる。(38a) はこの機能を持つ ‘hālak’ がヘブライ語進行形として用いられた例である。

- (38) a. BH: I going to die — Gen. XXV 32.  
 b. TB: I am at the poynte to dye,  
 c. AV: I am \*at the point to die: [MARGINAL NOTE: \*Hebr. *going to die*.]  
 d. PB: I am going to die;

これは英語の 'be going to ...' と類似の構造である。英語の 'be going to ...' は17世紀に今日の意味を獲得し、18世紀になって頻繁に起こり始めたのである (Scheffer, 1969: 271)。各英訳聖書における (38a) のヘブライ語進行形の訳は、当然のことではあるが、英語のこの表現の発達過程と符合している。すなわち、AV では MARGINAL NOTE でヘブライ語の "be going to" 表現が紹介されているが、本文ではこの表現は避けられている。このヘブライ語表現が、そのまま、英訳聖書に現れたのは、筆者の知る限り、PB (1764) が最初である。[ただし、このヘブライ語表現は Vulgata のラテン語を経由して OE の *Psalms* 等の行間訳に出現している可能性はある。]

## V. ヘブライ語進行形と OE, ME の重訳新約聖書の進行形

英訳新約聖書、特に古期及び中期英訳新約聖書には多くの進行形が使われていることが知られている。これらの進行形の中には、単純形と比較した場合、進行形独自の意味や使用目的を推し量ることが困難な例が少なからずある ((39b-c) & (Cf. a-b) 参照)。

また、Hashimoto (1977: 96) によると、1611年の AV の Four Gospels における進行形使用数は35例であるが、表8によると c.1385年のラテン語からの重訳聖書 Wycliffite Bible (WB) の前期訳 (EWB) における進行形使用数は47例である。これは、進行形の発達という点から見て極めて異常な現象であるということはいふまでもない。EWB のラテン語的要素の強い表現から脱却して、英語的表現に修正したと言われている後期訳 (LWB c. 1395) においてさえも、進行形使用数は AV とほぼ同数 (34例) である。

WB におけるこの不自然な進行形使用の原因は表8によって概ね明らかにされている。すなわち、WB の異常な進行形使用数は Vulgata における「*sum*+現在分詞」の英語訳に原因しているのである。そして、LWB は Vulgata のラテン語法から解放されていると言われているが、LWB の進行形使用に関する限り Vulgata のラテン語法から解放されているとは言い難く、進行形の大多数はラテン語の「*sum*+現在分詞」の直訳によるものである。

- (40) a. VUL: *erat enim habens multas possessiones* — Matt. XIX 22 & Mark X 22.  
 b. EWB: for he *was hauynge* many possessiouns. — Matt. XIX 22 & Mark X 22.  
 c. LWB: for he hadde many possessiouns. — Matt. XIX 22 & Mark X 22.  
 (Cf. a. LIN: *wæs forðon hæbbend monigra hamas ⁊ æhta* — Matt. XIX 22.)

表 8

WYCLIFFITE BIBLE		ラテン語表現 —FOUR GOSPELS—	
		<i>sum</i> + present participle	その他
Earlier Version (c. 1385)	47	<i>Matt.</i> V 25, VII 29, IX 36, XIX 22, XXIV 38, 38, <i>Mark</i> I 22, 39, II 18, V 5, 5, VII 15, IX 4, X 22, XIII 11, 25, XV 43, <i>Luke</i> I 21, 22, II 33, III 23, IV 20, 44, V 10, VI 12, VIII 40, IX 18, 53, XI 1, 14, XIII 10, XV 1, XVII 35, XIX 47, XXI 37, XXII 69, XXIII 8, XXIV 32, <i>John</i> I 28, III 23, VI 64, X 40, XIII 23, XVIII 25, 25.	<i>Matt.</i> XXIV 41.
Later Version (c. 1395)	34	<i>Matt.</i> V 25, XXIV 38, 38, <i>Mark</i> II 18, V 5.5, XVI 10, 10, <i>Luke</i> I, 21, II 33, III 23, IV 20, VI 12, VIII 40, IX 18, 53, XI 1, 14, XIII 10, XV 1, XVII 35, XIX 17, 47, XXI 37, 69, XXIV 32, <i>John</i> I 28, III 23, VI 64, X 40, XIII 23.	<i>Matt.</i> XVII 22, XXIV 41, <i>Mark</i> IV 17.

N. B. : (1) — =ギリシャ語原典の「*επι*+現在分詞」に対応するもの。(EWBのみ調査。)

(2) ~~~ =EWB ではなく、LWB にもみ現れた進行形。

(3) BE と現在分詞との間に場所の副詞があるものは除外されているが、下記のものは含まれている。

a) he was alone preynge — LWB, *Luke* XI 18.

b) the face was of him goynge — LWB, *Luke* IX 53.

(40) (Cf. b. LIN: *wæs forðon hæfde ⁊ hæbbendæhto menig* — *Mark* X 22.)

[LIN=Lindisfarne Gospels]

(41) a. VUL: *eris potestatem habens supra decem ciuitates* — *Luke* XIX 17.

b. EWB: thou shalt haue power on ten citees.

c. LWB: thou shalt *be hauynge* power on ten citees.

古期英語期の行間訳新約聖書 Lindisfarne Gospels には、(40 Cf. b) に例示されているように、「*sum*+現在分詞」を直訳して進行形とする訳と、原典の表現とは異なった単純形による訳とが並記されている場合が多く見られる。これらの現象は註をつける際にラテン語の直訳から生じる進行形の取り扱いに迷いがあったことを示す例であると言えよう。同じことが EWB の訳 (40b) と (41b) 及び LWB の訳 (40c) と (41c) においても言える。これらの例は、別の見方をすれば、単純形と進行形の機能分担が未分化の状態であったことをも示すものであろう。

Goedsche (1932: 471) や Mossé (1938: 14~18, 61-62) や Scheffer (1969: 131) 等の学者は、church Latin の「*sum*+現在分詞」は英語の進行形の発達にとって極めて重要な存在であったという立場をとっている。英語の進行形の発達に重要な役割を演じた「*sum*+現

在分詞」構造が、Vulgata で このように頻用された原因は何であろうか。

A *Grammar of the Vulgate* で Plater & White (1926: 109-110) は、「classical Latin ではこの構造に現われる現在分詞は形容詞的用法だけに限定されていたが、“popular speech” では“finite tense”を作るためにこの構造の中に現在分詞を自由に用いている。」という指摘をし、この構造をVulgataにおける“Syntactical Peculiarities”の項目の中に入れてい

る。表8には、EWBの進行形のうちラテン語の「*sum*+現在分詞」に対応している例が明らかにされているが、さらに同表には、それらのうち原典のギリシャ語構造「*ei $\mu$* +現在分詞」に対応しているものには下線が引かれている。それによると、Plater & White が“Syntactical Peculiarities”の一つに数えているラテン語構造「*sum*+現在分詞」の計46例のうち、41例はギリシャ語構造「*ei $\mu$* +現在分詞」に対応している。この事実は、WB(やOEの行間註)の新約に進行形が頻繁に出現するのは主としてこのギリシャ語構造に起因していることを示すものである。次に原典のギリシャ語聖書でこの構造がこれほど頻繁に使用された原因を探る必要がある。

原典におけるこのギリシャ語構造の頻用に関して、Wenham (1979: 156) は「新約における「*ei $\mu$* +現在分詞」の異常な頻用 (“unusual frequency”) はアラム語の影響によるものである」と言い、Blass, *et al.* (1961: 179 (§353)) は「この構造はギリシャ語でも可能であるが、*Mark* と *Luke* におけるこの構造の頻出は、少なくとも、セム語の強い支持があつて (“at least strongly supported by the extensive Semitic use”) 引き起こされたものである」と主張し、Moulton (1978: 226) は「新約におけるこの構造の異常な多さ (“extraordinary abundance”) はヘブライ語とシリア語から来ていると言わざるを得ない。ギリシャ語ではこの構造はこれ程発達していなかった。」と述べている。同様に Turner (1976: 87) も「この構造はアラム語とヘブライ語に特徴的であるが、ギリシャ語では十分に発達していなかった。この構造は他のギリシャ語に比べて Biblical Greek で特に頻用されている。」という指摘を行い、さらに、Thackeray (1909: 195) も「新約におけるこの構造の広範囲にわたる使用については、全面的にはではないにしても、ヘブライ語の影響のもとに生じた現象である」と主張している。以上のように筆者の知るギリシャ語の学者達は、ギリシャ語にもこの構造はあつたが十分に発達しておらず、新約の広範囲にわたるこの構造はセム語、特に、アラム語とヘブライ語の影響によるものであると主張をしている。そして、Thompson (1985: 50-51) は、「この構造は“Hellenistic literature”では“rare”であるが、LXXには驚くほど頻繁に (“with surprising frequency”) 見られる。LXXにおけるこの構造の頻用はヘブライ語進行形の直訳によるものである。」と言い、LXXにおける「*ei $\mu$* +現在分詞」の頻出が、新約のギリシャ語にこの構造を頻用させたことを示唆している。

また、このギリシャ語構造の機能については、現在形 (present indicative) の場合には単純形との意味上の区別は困難であるが、未完了過去形の場合には単純形と迂言構造との間に明確な違いが存在している (Moule, 1979: 17)。すなわち、迂言構造は単純形に比べて、“the continuity of the action” (Wenham, *loc. cit.*), “the continuing (or durative) nature of the action” (Thompson, *ibid.*: 53 (& Moule, *loc. cit.*)) 等を強調するために用いられている。

## VI. ま と め

以上 古期英語訳聖書から現代英語訳聖書に至るまでの英訳聖書の進行形とヘブライ語進行形との関連性について考察してきた。その結果、近代英語期及びそれ以後の直接訳聖書での進行形の出現には原典のヘブライ語進行形の影響が強く認められた。さらに、部分的には Mossé (1938: 16) によってすでに指摘されているが、OE や ME の重訳聖書における進行形の出現にもヘブライ語進行形の影響が及んでいることが明らかになった。すなわち、聖書ヘブライ語（やアラム語）の進行形が LXX のギリシャ語に「εἰμ+現在分詞」構造を多用させ、さらに、Hellenistic literature では起こり得ない程の大量のこの構造を新約のギリシャ語に出現させたのである。新約のこのギリシャ語構造が、ほぼそのまま、ラテン語訳聖書 Vulgata で複製されたために、Vulgata にも大量の「sum+現在分詞」というラテン語構造が出現することになったのである。従って、OE 期の行間訳（註）や ME 期の Wycliffite Bible（特に新約）に進行形が頻出するという現象は、遡れば、ヘブライ語やアラム語において頻用されていた進行構造に起因することになる。

OE や ME の進行形の中には church Latin の進行形の影響を強く受けたものが少なからず存在する。それ故に、OE や ME の進行形を扱う場合には本稿で明らかになった事実をも考慮する必要があるだろう。また、初期近代英語期及びそれ以後の英訳聖書を扱う際には、対応する原典の言語の表現形式及びその意味を考慮する必要があるということは言うまでもない。

## BIBLIOGRAPHY

## A. 引用文献

- Araki, K. & M. Ukaji (荒木一雄・宇賀治正明) (1984) 『英語史 IIIA』大修館。  
 Blass, F. et al. (1961) *A Greek Grammar of the New Testament and Other Early Christian Literature*. (trans.) R. W. Funk. Chicago: Univ. of Chicago.  
 Davidson, A. B. (1976<sup>4</sup>) *Hebrew Syntax*. Edinburgh: T. Clark.  
 Dennis, L. (1941) "The Progressive Tense: Frequency of its use in English," *PMLA*, Vol. LV, 855-865.  
 Driver, S. R. (1892) *A Treatise on the Use of the Tenses in Hebrew and Some other Syntactical Questions*. Oxford: OUP.  
 Goedsche, C. R. "The Terminative Aspect of the Expanded Form: Its development and its relation to the gerund," *JEGP*, Vol. XXI, 469-477.  
 Greenough, J. B., G. L. Kittredge, A. A. Howard, & Benj. L. D'ooze (1979) *Allen and Greenough's New Latin Grammar*. New York: Caratzas Brothers.  
 Hashimoto, I. (橋本 功) (1976) 「17世紀前半の散文における進行形の調査— Diaries, Letters, Essays における進行形の使用頻度—」, 『英語英文学』(広島大学英文学会) Vol. XX, 2, 25-40.  
 — (1977) 「欽定訳聖書の進行形」, 『言語文化研究』(広島大学総合科学部) Vol. II, 95-115.  
 Kautzsch, E. (1980<sup>15</sup>) *Gesenius' Hebrew Grammar*. Oxford: OUP.

- Mossé, F. (1938) *Histoire de la Forme PérIPHRASTIQUE Être+Participe Présent en Germanique, Première partie: introduction ancien Germanique — vieil-Anglais*. Paris: Librairie C. Klincksieck.
- Moule, C.F.D. (1987) *An Idiom Book of New Testament Greek*. Cambridge: CUP.
- Moulton, J.P. (1978<sup>2</sup>) *A Grammar of New Testament Greek: Prolegomena* Vol. I. (ed.) J.H. Moulton. Edinburgh: T. & T. Clark.
- Nagashima, D. (永嶋 大典) (1988) 『英訳聖書の歴史 付: 邦訳聖書小史』研究社.
- Plater, W.E & H.J. White (1926) *A Grammar of the Vulgate: Being an introduction to the study of the Latinity of the Vulgate Bible*. Oxford: OUP.
- Scheffer, J. (1969) *The Progressive in English*. Amsterdam: North-Holland.
- Terasawa, Y. (寺澤 芳雄) (1985) 『翻刻版『欽定英訳聖書』—文献学的・書誌学的解説—』研究社.
- Thompson, S. (1985) *The Apocalypse and Semitic Syntax*. Cambridge: CUP.
- Thuckera, H. St John (1909) *A Grammar of the Old Testament in Greek*. Cambridge: CUP.
- Turner, N. (1976) *A Grammar of New Testament Greek: Prolegomena* Vol. IV. (ed.) J.H. Moulton. Edinburgh: T. & T. Clark.
- Visser, E. Th. (1973) *An Historical Syntax of the English Language* Vol. III. Leiden: E. J. Brill.
- Wenham, J. W. (1963) *The Elements of New Testament Greek: Based on the earlier work by H.P.V. Nunn*. Cambridge: CUP.
- B. 使用テキスト
- AV=*The Holy Bible: a facsimile of the Authorized Version published in the year 1611 with an introduction by A.W. Pollard and illustrative documents*. 1911. Oxford: OUP.
- BH=*Biblia Hebraica*. (eds.) R. Kittel, et al. 1977. Stuttgart: Deutsche Bibel-stiftung.
- EWB & LWB=*The Holy Bible: Containing the Old and New Testaments, with the Apocryphal Books in the earliest English versions made from the Latin Vulgate by John Wycliffe and his Followers* 4 vols. (eds.) The Rev. Josia Forshll & Sir Frederic Madden. 1850. Oxford: OUP; (repr.) 1982. New York: AMS Press.
- The Greek Testament* 4 vols. (ed.) H. Alford. 1873. Boston: Lee and Shepard.
- LIN=Lindisfarne Gospels *The Holy Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions*. (ed.) W.W. Skeat. 1871-87. Cambridge: CUP.
- NEB=*The New English Bible: The Old Testament*. 1970. Oxford: OUP, Cambridge: CUP.
- OEH=*The Old English Version of the Heptateuch*. (ed.) S.J. Crawford. 1922. EETS. OS. 160; (repr.) 1969.
- PB=*A New and Literal Translation of All the Books of the Old and New Testament: with notes, critical and explanatory* 2 vols. (trans.) A. Purver. 1764. London: W. Richardson and S. Clark.
- TB=*William Tyndale's Five Books of Moses Called the Pentateuch*. (ed.) J.I. Mombert. 1884. (newly intr.) F.F. Bruce. 1976. Sussex: Centaur.
- VUL=*Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem* 2 vols. (ed.) R. Weber. 1969. Stuttgart: württembergische Bibelanstalt.



## ABSTRACT

**Progressive Forms in English Biblical Translations and  
their Relation to the Hebrew Language**

Isao Hashimoto

(Biblical) Hebrew has an expression similar to the English progressive forms 'be+v-ing' in construction and meaning. We call it the Hebrew progressive form here. This is a tentative study on the influence of the Hebrew progressive form on the use of the English progressive form in English Biblical translations.

Firstly, the progressive forms of the following translated versions of the Old Testament were investigated: Tyndale's Bible (*Genesis* and *Exodus*) published in 1530, the Authorized Version (*Genesis, Exodus, Job, Psalms* and *Nehe-miah*) published in 1611, Purver's Bible (*Genesis*) published in 1764 and the New English Bible (*Genesis*) published in 1970, and the progressive forms which are used in these materials were compared with the corresponding Hebrew expressions. The following are significant results of the comparison:

The progressive forms in Tyndale's Bible correspond to the Hebrew progressive form in about 62.5% of all the cases, those in the Authorized Version in about 77.2%, those in Purver's Bible in about 77%, and those in the New English Bible in about 58%. These facts show that the Hebrew progressive form is a prime cause of an inducement of appearance of the progressive form in the English Biblical translations, especially in the translated versions in the Early Modern English period, when the use of the progressive forms was not common.

Secondly, there were examined the progressive forms of the *Four Gospels* of two indirect Biblical translations: two versions of the Wycliffite Bible (c.1385 and c.1395), and one direct translation: the Authorized Version. And Latin and Greek expressions corresponding to their progressive forms were investigated respectively. The result of the investigation is summarized as follows:

The progressive forms appear unnaturally with more frequency in the earlier version of the Wycliffite Bible (47 exx.) than in the Authorized Version (35 exx.). Even those in the later version of the Wycliffite Bible (34 exx.) appear almost with the same frequency as those in the Authorized Version. This unnatural linguistic phenomenon is due to a frequent use of the Latin construction 'sum+the present participle'. In the Wycliffite Bible, the Latin

construction is rendered faithfully into English, especially in the earlier version. The frequent use of the Latin construction in the Latin New Testament is caused by the extraordinary abundance of the Greek construction 'εἰμὶ+the present participle'. According to Greek linguists or philologists, the development of the Greek construction was not far advanced in Hellenistic Greek, not even in the popular style of the papyri, and the Greek construction in the New Testament is strongly supported by the Hebrew and Aramaic progressive forms. This fact shows that the Hebrew progressive forms were reproduced in English via religious Greek and the Latin of the Vulgate at a very important stage of the development of the English progressive forms, *i. e.*, in the Old and Middle English period.